



光が丘の起源は、80年前の陸軍飛行場だった

取材日 令和5年1月20日 更新日 令和5年3月27日

令和4年度

その他いろいろ

区民の憩いの場でもある光が丘公園に、ひっそりと『平和への祈り』の像があります。

光が丘公園が、かつて「成増陸軍飛行場（成増飛行場）」と呼ばれていたことは、歴史に詳しい方ならご存知かもしれませんが、この飛行場に特攻隊がいて、どのように機能していたかはなかなか知り得ません。

今回は、郷土史家の山下さんに、その詳細を聞いてきました。



体育館と図書館のちょうど間、けやき広場に面した場所にある像

東京都立 光が丘公園（光が丘公園サービスセンター）

※以下、文中敬称略。

※取材はコロナウイルス感染症の予防対策に十分配慮し、行われています。

取材ご担当：郷土史家・カメラマン／山下 徹さん

所在地：練馬区光が丘4-1-1

電話：03-3977-7638

URL：<https://www.tokyo-park.or.jp/park/format/index023.html>

東京を守るために急遽作られたのが成増陸軍飛行場

——光が丘公園は、そもそも軍用地だったのでしょうか？

山下 「光が丘公園は、軍関連の付帯施設の跡地ではありません。現在の居住区のあたりにそれらが集中していました。この“けやき広場”のあたりには、滑走路や駐機場、機関砲の陣地、それにピストと呼ばれる兵隊の待機・待合所がありました。もしかしたら皆さん、光が丘公園全体が、飛行機の滑走路と勘違いされているかもしれませんが、滑走路は長さ1200m・幅60mほどで、現在の“ふたご橋”のあたりにありました。

また、グラントハイツのメインストリートも、『滑走路を利用して作られた』と言われていますが、これは正確ではなくて、ふたご橋の西側、清掃工場あたりを通過していました」



山下さんはカメラマンでもあり、その資料収集に撮影技術も生かしている

——この場所は、戦争が始まっただいぶん後に作られた、と聞きましたが。

山下 「戦争半ばのころですね。成増の飛行場は、当初は作る予定は全くありませんでした（調布飛行場があったため）。現在、調布まで電車で移動すると、1時間弱くらいですが、飛行機で行けば、それこそ10分程度でしょうから、近いですね。

今の赤塚新町公園の辺りに整備中隊の大きなテントがあり、消防署の所に第3中隊が、射撃場は今の光丘高校のところにありました。秋の陽公園には迎撃用の機関砲がありましたが、当然今は、その跡も残っていません。今あるのは、公園の北側に、掩体壕（えんたいごう）と言って、飛行機を隠すコンクリート製の施設が残っているだけです。グラントハイツを取り壊す時に、多くが撤去されていますので、成増飛行場の名残はほとんどないんですよ。

ちなみに光が丘公園には、このように大量に木々が植っていますが、これらも団地を作る時に植えたものがほとんどです」



当時の関係者が、のちに記憶を元に書き起こした図面がこちら

——ところでなぜ、成増陸軍飛行場という名前なのでしょうか？

山下 「それは回答がなかなか難しいですね。なぜなら、この場所が『成増飛行場である』という公式な記録は残っているのですが、『なぜ成増なのか？』という記録はないからです。諸説あって、練馬区の公式記録では、当時は練馬の方が知名度的としては上で、その名前をつけると敵にバレてしまうから成増とした、とも？言われています。

私個人は、かつて成増駅の南側に『兎月園（とげつえん）』という遊園地があって、その周辺には成増農園と呼ばれた、大正時代の裕福な家庭や元華族たちが、郊外の農村で自分たちで野菜を作る、今でいう家庭菜園を楽しんでいたのですが、ここから“成増”の名前が引用されたのではないかな、と思っています。ただ、命名の理由は必ずしも一つだけとは限りませんからこの辺りも歴史の面白いところですね」

——光が丘駅周辺の道路が二層構造になっている理由について教えてください。また光が丘の命名についてもご存知でしたら教えてください。

山下 「それらの点は、私自身がまだ調査中ですので、詳細には調べきれていないのですが、災害時の避難経路として二重構造になっているようです。住民の安全確保のため、主要道路と交差しないように、道路を通らずに公園まで避難できるようになっているそうです。
光が丘の名前については、読売新聞にその記事が掲載されていました。元々は『緑と太陽の街を作る』がキャッチフレーズでした。これにちなみ、光が丘、と命名されたそうです」



持参された本「光が丘公園」。たまたま著者と同じ苗字ですが、徹さんとは別の方です

山下 「この本には光が丘公園の各場所がどのように出来たか、工事の経緯・状況など詳細が載っています。ただ、公園が直接関わっていない、成増飛行場に関する情報に関しては、疑問が残る記述も多いです。

例えば、真珠湾攻撃を受けたアメリカは、どうしても日本に仕返しがしたかった。しかし当時、日本本土を直接攻撃できるアメリカの基地はなかった。それで考えて、アメリカ海軍の空母に陸軍の双発爆撃機を搭載し、房総沖までやってきて、そこから出撃するんです。

この出撃があったのが昭和17年4月18日のことです。12月の真珠湾攻撃からわずか4ヶ月後のことですから、日本軍も完全に油断していた状況でした。ここで対空防御の手薄さに気づいたことが、そもそもこの辺りの緊急整備につながります。先ほどの調布飛行場は、昭和16年に、元は東京都の持ち物だったものを軍の飛行場として整備しましたから、買収や建設の計画は、東京都の公文書館に行くと記録が残っています。一方の成増飛行場の建設は陸軍により計画されたので、公式には残っていないのです。もちろん、どこかにひっそりと残っている可能性はゼロではありませんが」

成増から飛び立っていった特攻隊

——実は私の父親は職業軍人で、除隊前の最後の仕事は、身の回りの文書の焼却処分だったそうです。



穏やかな日差しの中、公園内を歩きながらお話を聞きます

山下 「私の父は勤労働員で、実際にこの飛行場の整地作業に従事しましたが、おっしゃる通り、終戦後、玉音放送が流れて最初の作業は、情報の焼却処分でしたので、そこに従事された方も多いと思います。この件に限らずですが、そうやって残るものとそうでないものがありますので、例えば図書館に行って“一次史料”とされているものも、果たして内容が本当に正しいかどうかはわからないのです。

特に注意しなければいけないのは、引用されている箇所です。自分で研究したり調査したものは、ある程度の深掘りが出来ていることが多いですが、それ以外の部分に関してはどうしても引用されます。その引用元が、果たして正しいかどうかなんて、調べたりしませんからね。特に現代はインターネットの社会ですから、引用につぐ引用で、間違っているかもしれない情報がどんどん拡散されてしまいます。この点には注意が必要だと思います」

山下 「例えばこの本には、このような記述があります。

——昭和20年8月、広島への新型爆弾の投下から9日目の8月15日に日本の無条件降伏により戦争が終わり、同年8月24日、数台のジープに分乗した米兵が成増飛行場にやってきて、飛行場の解体が行われ、焼き払われた——とありますが、これは間違いです。マッカーサーが沖縄から厚木の基地に来たのが8月30日です。マッカーサーが来る前に、まず先見部隊が28日、現地を視察します。降伏、と言っても安全かどうかわかりませんからね。近場であれば、飛行機での偵察でしょう。とすると、少なくとも24日にジープで直接、米兵がやってくることはあり得ないと思います。

また、GHQの降伏受け入れの条件も武装解除ですから、飛行機は、滑走路や駐機場に並べ、飛べないようにプロペラを下ろし、機関銃も外されました。この“解除”の判断のために、本部から飛行機などは焼かないこと、とお達しが来ていたのです。焼かれた文書の煙は出ていたと思いますので、おそらくそれを見て、『焼き払われた』となったのでしょう。

この記述も、当時の関係者から直接聞いたものでしょうから、嘘ではないのですが、当時取材をした担当者が情報に疑いを持たなければ、たとえ勘違いだとしてもそれが公式となってしまいます。

例えば47戦隊に関係した隊員たちの数も、当初は600名ほどと考えていましたが、後々よく調べると、400名くらいであったことがわかりました」



ちょうどこの、ふたご橋からの延長上にある観賞池のあたりも滑走路だったとのこと

——特攻隊が成増に立ち寄ったり、ここから飛び立って行ったことは、全く知りませんでした。

山下 「特攻隊について少し説明しましょう。まず、陸軍と海軍があります。海軍はいわゆる神風です。フィリピンで最初に特攻した人たちがそう呼ばれています。この頃は日本の空母はほぼ全滅していますので、陸上の海軍基地から飛び立っています。東京都で言えば、羽田がそうですね。横須賀や厚木など、海に近いところはほぼ海軍の飛行場です。爆弾を抱え敵艦に体当たりをしますが陸軍には別の特攻隊がありました。成増飛行場に限って言えば、空対空※です。つまり、B-29に特攻していたのです。震天制空隊（しんてんせいこうたい）と言います。弾薬や爆弾を積んでいると高空には行けないので、武装をせず丸裸の状態です。硫黄島が陥落すると小型戦闘機による攻撃も始まり、防空飛行隊の一部は迎撃を止められました。陸軍では特攻隊「振武隊」などが結成され、沖縄戦などに投入されて艦船に突っ込むことになります」

※第二次世界大戦の時期に大日本帝国陸軍が編成した特別攻撃隊（空対空特別攻撃隊）の1つ。

——この場所から飛び立った特攻隊は、具体的にどのあたりを攻撃していたのですか？

山下 「もともと成増飛行場は、真珠湾攻撃の後、帝都東京を守るべく、作られました。最初は東京方面にやってくるB-29に対して特攻を試みていましたが、そのうち太田、小泉、茨城などで飛行機を作っていたので、そこに飛んでくるB-29迎撃（ようげき）のために飛んでいきます。ですので、茨城で亡くなっている方もいます。大体、敵のコースはわかっているんです。グアム島・硫黄島があって、小笠原諸島、伊豆諸島、と続きますが、その上を飛んできます。それで富士山を目印にし、見えたとこで東に旋回し、東京に来るわけです」

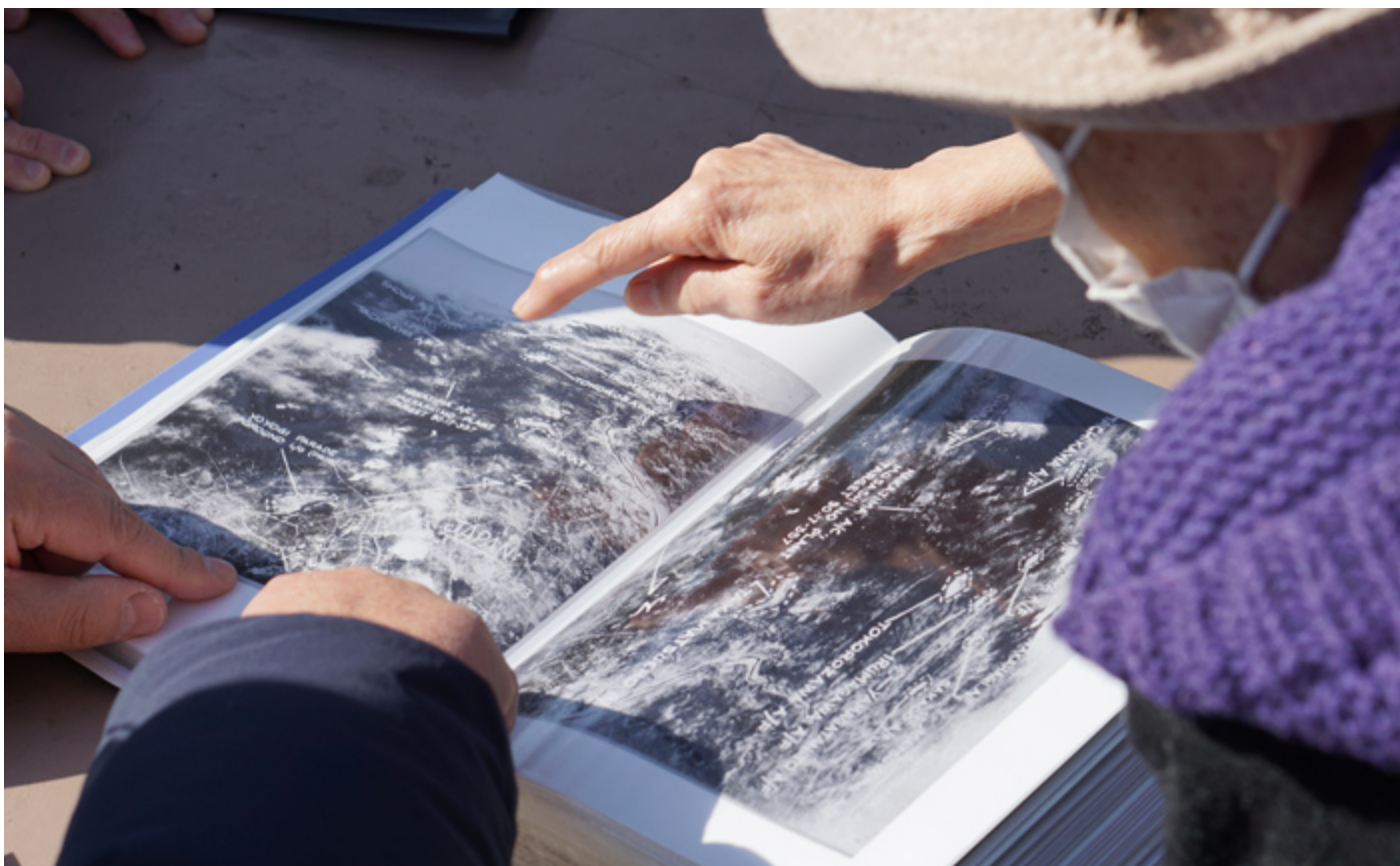
——そのルートが日本軍に知られているのに、アメリカ軍は変更しなかったのですか？

山下 「日本軍が届かない高さで飛んでくるのです。B-29は最高で、およそ高度1万2000mくらいまで行けるのですが、この高さだとガソリンの消費量も多いんです。作戦としてギリギリになってしまう。そこで少し高度を落とし、1万mくらいから爆撃します。徐々に高度が下がっていくのですが、初期は、このくらいでした。いずれにしてもこの高さですと、日本軍の地上の高射砲でも届きません。ですから安心して同じルートで飛んできていました。今で言う中央線沿線にあった、中島（武蔵野）エンジン工場が攻撃目標でもありましたので、それを守る意味も成増にはありました」

飛行場として機能したのは6ヶ月間

——成増飛行場の飛行機は何機くらいあったのでしょうか？

山下 「飛行機の定数は54機と言われていますが、一部の名簿しか残っていないので、何人の空中勤務者がいたのか正確にはわかりません。事故もありましたし、技術が高い人は教官として他の地域へ転出もしていましたから、入れ替わりも激しかったようです。サイパン島が落ち、絶対防空圏が破られたあと、昭和19年の11月1日から数回、偵察機がやってきます。それを迎撃しに飛び立つのですが、そもそも戦闘機って2時間くらいしか飛ばせません。戦闘で動き回ると、さらに短くなる。しかも完全武装で銃弾も積んでいるわけです。高度的にも全く届かず、虚しく基地に戻ってきます」



当時のアメリカ軍が、かなり正確に情報を把握していた様子が写真からわかります

山下 「ここに、アメリカ軍が撮影した航空写真があります。見るとわかりますが、もう日本軍は丸裸だったんですね。極秘で分かりづらいと考えて作ったはずなのに、高松という地名まで入っています。写っている中島のエンジン工場への攻撃が11月24日でした。これらを邀撃するために、高度1万mまで行くのです。航空機は上からでないと、ほぼ攻撃できませんからね。で、どうしたかという、重たい酸素ボンベを最低限のものだけとし、冬の上空、マイナス50度のところに、ろくな防寒装備もなしに飛ぶのです。そういう状況で戦っていたのです」

—この写真を見ると、基地といっても何も見えないですね。

山下 「そうなんです。よく、地元の古い方のお話を聴くと『成増には何もなかった』という言葉が出てくるのですが、これは終戦間際のことですね。陸軍の命令は、この付近の住民を立ち退きさせて、『(昭和18年の)10月に飛行場を完成させる』というものでしたが、10月までにできたのはかろうじて飛行機の離発着ができる滑走路だけでした。ほぼ完成したのは、昭和20年の1月ですから、“成増飛行場の付帯施設はどのようなものでしたか？”という質問は、答えるのが難しいのです。というのも、1月に完成した建物も、結局狙われてしまうので3月4月には取り壊すんです。ですから終戦を迎える時は、敵に破壊されたのではなく、もともと建物が少なかった状況でした。

戦隊も九州や山口の方に行っていましたので、この飛行場がある意味で一番輝いていた時期は、昭和19年の11月から20年の5月までの、わずか6ヶ月間ですね。

20年に入ってからの特攻隊の訓練基地にもなりますが、特に終戦間際になると、物資もなくなり、熟練工も兵役でいなくなるから、戦闘機の性能も、結果的に下がっています」



特攻隊の集合写真、ベテランクラスの隊員でも25-6歳とのこと



特攻機には、機体に二つ巴が記されていた
(弓手に巻く鞆・勾玉が図案と言われる神霊のシンボル)

——空対空特攻隊は、海軍機と異なり（高度を出すために）爆弾を積んでいなかったため、生還できる可能性があったそうです。それでも、飛行中の座席から窓のハッチを外し、立ち上がって飛び降りるのはほぼ不可能でしたから、何らかの事情で機体が損傷し、かつ自分が放り出される状況という条件でしたが。そうして生還した方の話や資料を、一つひとつ丁寧に集め、今に語る山下さんの活動に感銘を受けます。

明るく広大な光が丘公園に、このような歴史があることは知りませんでした。

けやき広場にひっそりと立つ『平和の像』。これからは、若くして散っていった方たちのことも、頭の片隅に思い出すとともに、成増飛行場の歴史も受け止めた上で、平和を祈りたいです。

サポーターの取材後記

ヒロちゃん

数年前、ウォーキングを兼ねて立ち寄った光が丘図書館のそばに、“平和記念碑”があるのに気づきました。「光が丘で、なぜ平和？」と思い調べてみたら、ここは先の戦争開始後に急遽造られた陸軍飛行場の跡地で、特攻隊が出撃していた歴史の地でした。

戦後に接收され、長く米軍キャンプとして使用された事は認識していましたが、その前に飛行場があったとは全く知りませんでした。

今回、この「成増飛行場」に造詣の深い山下さんから貴重なお話をたくさん伺えました。また、所有されているたくさんのモノクロ写真（例：特攻隊の飛行機や乗組員）から、当時の状況をビビッドに知る事ができました。

山下さんは、戦後の米軍キャンプに関する情報もお持ちだそうです。来年度の新しい取材サポーターの方々に、是非「光が丘近代史」の後編として、続けて取材、掲載して頂く事を期待しています。

たてみーな

光が丘図書館には何度も訪れたことがありますが、そのそばにある「平和への祈り」石碑に目を留めたことはありませんでした。今回初めて石碑の文字をじっくり読み、ここに成増陸軍飛行場があったこと、練馬区が50年前に非核都市練馬区宣言を制定したことを知りました。

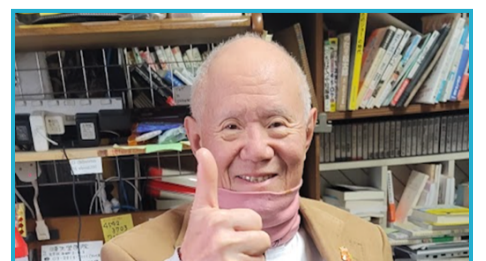
山下さんは、27年前にこの石碑の除幕式に立ち会い、そこで成増会という戦友会を知ったことをきっかけに関りが始まったという方です。熱意あるお話と、見せていただいた写真や資料には驚くばかりでした。一番驚いたのは、第二次大戦末期にここから特攻隊が飛び立ち、B29に体当たりしたという事実でした。この東京のこんな近くの場所にそういう人達がいたということは衝撃でした。

見せていただいた特攻隊の集合写真にはまだ10代の若者の写真もありました。そして、B29に体当たりして煙を噴きあげ墜落していく写真もありました。当時は、戦意高揚の目的もあり、新聞記者の方が場所を秘密にして写真を撮影しにきていたそう。また、確実に体当たりしたかどうかを目視し確認する任務もあったのだそうです。

これらの貴重な資料や写真をきちんと整理し保管し継承されている山下さんには深い敬意の念を抱きました。

[サポーター紹介 ▶](#)

おすすめの体験記





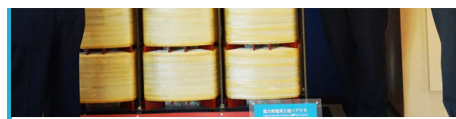
スマホ初心者の頼れる存在、長安透さんに聴く「スマホデビューはどうしましょう？」

今や70歳代での普及率も8割弱と言われるスマートフォン（以下スマホ）。



シニアナビねりまサポーターの活動とそのエネルギーの源をご紹介します！

今回のシニアナビねりま「サポーター体験記」は特別編です。



世界に羽ばたく企業が東大泉に！見えない場所で大活躍する製品とは？

皆さんも頻繁に使うスマートフォンや自動販売機。また、最近目にする機会が



ちば先生の、穏やかでフランクなお人柄に魅了される

あしたのジョーにおれは鉄兵、あした天気になあれなど、

 シェアする

 ツイートする

シニアナビねりま

練馬区高齢社会対策課 いきがい係
〒176-8501 東京都練馬区豊玉北6-12-1
03-5984-4763（直通）

※ 受付時間：午前9時～午後5時（土日祝日、年末年始を除く）

© 練馬区